

中部 ものづくり 探訪 プラモデル

特色ある地域産業

地域の資源や技術を活かし、特色ある製品づくりを行っている企業群を「地域産業」として紹介します。



2013年5月に開催された第52回静岡ホビーショー。世界中から8万人ものプラモデルファンが集まる。◎



子ども、大人、そして女性を魅了する“プラモ”へ

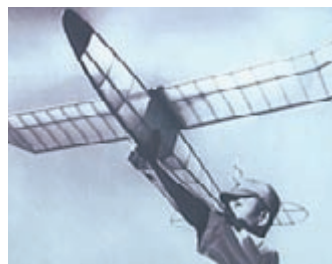
木製からプラスチック製への転換が、模型の可能性を広げた——

1 全国から集まった職人の技術が 木製模型へとつながっていく

静岡市とその周辺エリアは、世界的に注目される模型メーカーの集積地である。世界90カ国に輸出され「世界のTAMIYA」と称される(株)タミヤ、累計販売4億個を記録(2010年)した「ガンプラ」の(株)バンダイ ホビー事業部などがあり、世界中のファンから注目される「プラモデルのメッカ」として発展してきた。

静岡市を中心としたエリアに模型メーカーが集まっているのには理由がある。この一帯は徳川家康が晩年を過ごした歴史があり、駿府城や浅間神社、久能山東照宮の建築など大きな事業を行なうため、全国から宮大工、左官、建具職、飾り職、塗師など多くの優れた職人が集められた。これらの普請が終わった後も多くの職人が住み続け、その技術を地域の人々に伝えたことが、今の模型産業につながっているとされる。

なかでも静岡市は、全市面積の約7割を占める森林資源に恵まれたことから「木」を中心とした地場産業が栄えていった。その一つが木製模型。



現在のプラモデルの源流と言われる
木製模型飛行機 ◎

1932(昭和7)年に青島飛行機研究所(現(株)青島文化教材社)から日本で初めて木製の模型飛行機が発売された。そのなかでもゴム動力で空を飛ぶ「ライトプレーン」は学校教材として国の指定を受け、静岡の模型産業の基盤づくりに貢献した。

2 木製からプラスチック製へ 時代に合わせて産業が変化

(株)青島文化教材社を追いかけるように、静岡市には数々の木製模型メーカーが誕生した。1943(昭和18)年には戦前の模型ブームが頂点に達し、静岡の

模型産業は隆盛を極めていた。しかし、転機が訪れた。1945(昭和20)年、第二次世界大戦の影響により木製模型飛行機が発売中止となり、さらに1950(昭和25)年には外国製プラモデルが輸入され始めた。これまでの木製模型と違い、プラモデルは精密で、しかも簡単に作ることができる。このため木製模型の需要は減少し始めた。これまでの木製に頼るか、プラスチック製に乗り出すか。外国製プラモデルが増加し続ける様子を目の当たりにした多くの企業は、迷いながらも時代の趨勢に合わせてプラスチック製模型メーカーへと舵を切っていった。

現在模型メーカーを名実ともにリードしている(株)タミヤも、同じように木製からプラスチック製へと変遷をたどった企業の一つである。1946(昭和21)年に後の田宮模型につながる田宮商事が創業。建材を主に製造していたが、時代に合わせて木製木工部門を設立し、船舶や飛行機の木製模型を製作するようになった。そして1960(昭和35)年にプラモデルの第一弾として、1/800スケールの戦艦大和を発売した。

静岡の模型産業を語るうえでは、(株)バンダイの存在も欠かせない。1950(昭和25)年に玩具製造を生業とする(株)萬代屋として東京都台東区で創業。その後、静岡市にあった今井科学(株)の業務を引き継ぎ、静岡でプラモデルの生産に乗り出した。同社が1980(昭和55)年に発売した“ガンダム”の愛称で知られる「機動戦士ガンダム」のプラモデルは、子どもや大人を魅了し、プラモデルを広く身近なものにした。

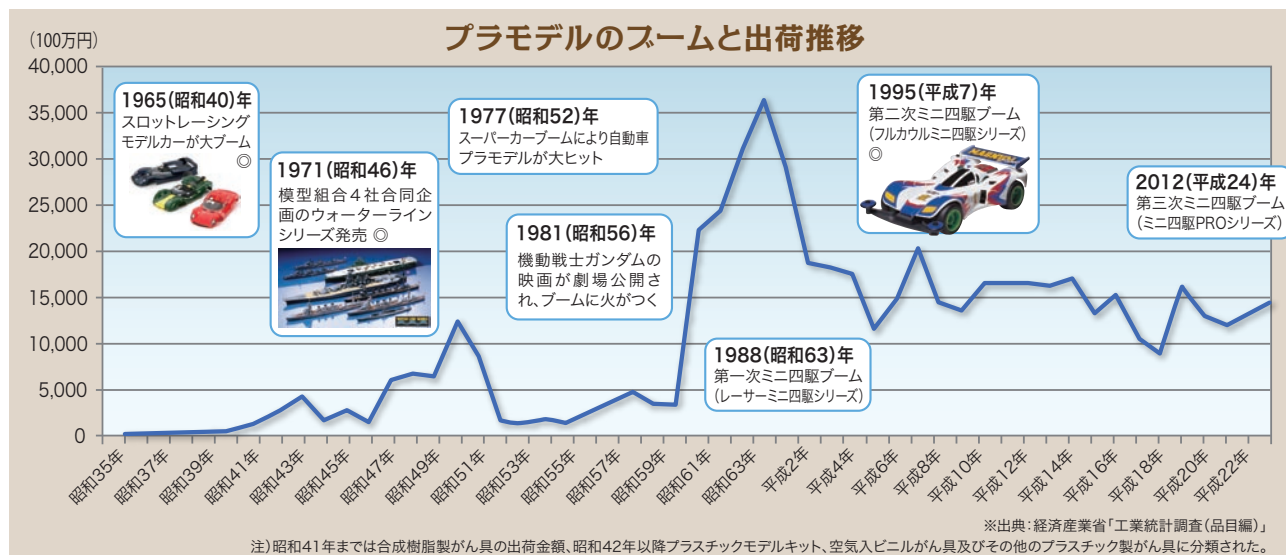
「ボルシェ」を解体し、プラモデルの資料に

プラモデルの品質を決める大きな要素として挙げられるのが、実物をいかに精密に再現するかである。(株)タミヤ会長の田宮俊作氏は昭和50年代に、本物の「ボルシェ」をプラモデルづくりの資料として購入。細部まで分解して、個々の部品や構造を研究した。このボルシェは、田宮氏のプラモデルづくりへの情熱を表すものとして、(株)タミヤ本社に今も飾られている。



3 模型メーカーが手を結び、合同企画やイベントを実施

静岡の模型メーカーが成長してきた背景には、模型メーカー同士が、ときに助け合い、ときに刺激合ってきたことにある。木製模型が静岡において一大産業になっていた1955(昭和30)年、静岡県内の模型メーカーが結集して設立された「静岡模型教材協同組合(以下、模型組合)」が良い例だ。1959年(昭和34年)には、現在の「静岡ホビーショー」へと発展していく「第一回生産者見本市」を開催した。また1971(昭和46)年には、(株)青島文化教材社、(株)タミヤ、(株)ハセガワ、フジミ模型(株)の模型組合4社合同企画による艦船モデル「ウォーターラインシリーズ」を発売。実物の1/700スケールで製作したこのシリーズのヒットにより、艦船モデルの国際標準スケールが1/700で統一されたのも、静岡が世界の模型産業をリードしている証だ。この企画は40年以上たった今でも続いている(現在はフジミ模型(株)を除く3社)。



新しい発想で、女性や親子が楽しめるプラモデルを生み出す

4 「世界の模型首都静岡」に 世界中からプラモファンが集結

現在、静岡のプラモデル出荷額は全国の90%以上を占め、その歴史と圧倒的なシェア、さらには世界からの注目度から、静岡は「世界の模型首都」と称されている。毎年5月に開催されている「静岡ホビーショー」には国内から70以上の企業・団体が出展。4日間の開催期間のうち、木・金曜日は仲介業者や販売店を対象とした新製品発表や商談が行なわれ、海外バイヤーも数多く訪れる世界的なイベントとして注目されている。また土・日曜日は一般公開され、8万人以上が来場している。

模型組合の理事長でもある田宮俊作氏(株タミヤ会長)によれば、「タミヤのミニ四駆、バンダイのガンブラのみならず、静岡の模型メーカーは各社がそれぞれに特徴を持っている。同じものを競い合って作るのではなく、それぞれが刺激し、協力し合いながら模型を開発していく姿勢が続いているからこそ、今もなお静岡はプラモデルの中心地としての魅力と誇りを持っている」という。しかし、同時に懸念も持つ。「ユーザーである子どもたち、そして子どものころにプラモデルに熱中してきた大人たちの状況はつねに変わっている。テレビゲームのブームに影響を受け、今はスマートフォンに時間を奪われている。各社がプラモデルの魅力、ユーザーのニーズを改めて見つめ直し、挑戦することが大切だ」と、業界を厳しい視点で見つめながら、後輩たちを鼓舞する。

5 手づくりの楽しさを伝え、 新たなファン獲得へ

プラモデルの市場規模は、少子化に加えゲームなど遊びの多様化や海外メーカーとの競争などにより、ここ20年間で半分以下の落ち込みとなっている。この状況を打破しようと、より多くの人々にプラモデルの魅力をもう一度知ってもらうために、様々な取り組みを先導しているのが田宮氏だ。

田宮氏は、「ウォーターラインシリーズ」を提案した人物であり、模型産業をリードしてきた世代の一人。

だからこそ、業界全体の未来を憂い、ユーザーを育てる重要性に気づいている。「静岡ホビーショー」だけでなく、模型産業の将来に渡る下地づくりとなる活動にも力を入れている。自社の主催でミニ四駆やRC(ラジコン)カーの大会、工作教室などのイベントを年間で100回以上開催。ミニ四駆ブーム世代が親になったこともあり、親子での出場者も多く、共通の趣味を楽しむという側面も生み出した。



家族連れで賑わう工作教室(上)とミニ四駆グランプリ(下) ©

このような田宮氏の思いに呼応するように、静岡の模型産業を支えているのが静岡市である。「ホビーのまち静岡」推進事業を2007(平成19)年度より実施し、業界および地域経済の活性化を図る援助をしている。2010(平成22)年7月~2011(平成23)年3月に開催した「世界の模型首都 静岡ホビーフェア」では、ホビー関連の観光資源を集め国内外のからの160万人を超える来場者に、ホビーを「見て・触れて・感じて」もらうことで、プラモデルをPR。目玉となった1/1スケールの「等身大ガンダム立像」は日本中のファンを驚かせた。



「世界の模型首都 静岡ホビーフェア」に併設されたホビーミュージアムも各メーカー歴代のプラモデルが展示され人気を博した ©

また、「ホビーのまち静岡」推進事業では、県内模型メーカー6社、静岡市、静岡特産工業協会、静岡商工会議所で「ホビー推進協議会静岡」を立ち上げ、手作りホビーワールド「クリスマスフェスタ」の開催、新たな情報発信基地としての「静岡ホビースクエア」を開設するなど「ホビーのまち静岡」の認知度向上に努めている。

ホビー推進協議会静岡の模型メーカーと特長



■(株)タミヤ

飛行機や艦船、ミリタリーなどのスケールモデルから、RCカーやミニ四駆まで、組み立てて学習する工作模型、さらに工具類や塗料などを開発・生産している。



■(株)ハセガワ

1961(昭和36)年よりプラモデル生産を開始、当初のラインアップに飛行機が多かったことから「飛行機のハセガワ」と呼ばれるようになった。



■(株)バンダイ ホビー事業部

1980(昭和55)年の誕生以来、30年以上も熱い支持を受け続けている「ガンダム」。他にもアニメやゲームのキャラクターをモチーフにした話題のプラモデルを揃えている。



■(株)青島文化教材社

プラモデル、ダイキャストミニカー、フィギュア、キャラクターぬいぐるみのほか、デコトラ、惑星探査機「はやぶさ」など最新の話題をキャッチして商品化している。



■(有)エムエムピー

ブランド名はEBBRO(エプロ)。国産車を中心に、最新のレースマシン、ヒストリック・フォーミュラなどを発売。車種のこだわりや歴史を再現している。



■(株)ウッディジョー

国宝・五重塔をはじめ古建築物一般、城郭模型を開発する木製模型メーカー。また日本唯一の帆船模型メーカーとしても知られている。

6 コラボや女性向けなど つねに進化を続けていく

田宮氏の言葉にもあるように、静岡の模型メーカーは、それぞれに独自の製品を開発し、特長を持ちながら成長を目指している。「機動戦士ガンダム」や「宇宙戦艦ヤマト」のようにアニメとコラボした商品はこれまでもあったが、近年の傾向としてさらに増加している。例えば、2010(平成22)年、WIN-WINの関係で業界を盛り上げるため、(株)バンダイと(株)ハセガワがコラボし、ANAの特別機「ガンダムジェット」の機内販売限定の商品を開発した。また、ブラウザゲーム「艦隊これくしょん〜艦これ〜」やアニメ「ガールズ&パンツァー」の人気から艦船や戦車といったスケールモデル(縮尺模型)の人気が上昇するなど、様々なメディアを入口に、新しいユーザーがプラモデルに目を向け始めている。一方、(株)タミヤではユーザーの裾野をさらに広げるために、粘土などから本物そっくりのお菓子を作る「タミヤデコレーションシリーズ」を発売し、女性という新たな層の開拓を始めている。



タミヤデコレーションシリーズ ©

木製からプラスチック製へと材質が変わっても、つねにユーザーを意識しながら新しい製品を生み出している静岡の模型産業。「模型は、大人とも子どもとも夢を分かち合えるホビー」と語る田宮氏の言葉に象徴されるように、静岡の模型メーカーは熱い夢を持ち、これからもプラモデルの魅力を伝え続ける。

取材協力・資料提供／(株)タミヤ、静岡市、静岡ホビースクエア 写真提供／◎：(株)タミヤ ○：静岡ホビースクエア

静岡ホビースクエア



ホビー推進協議会静岡が主体となって、静岡が誇るプラモデルの魅力と優れた地場産業をより多くの人に伝え、静岡のホビーを楽しんでもらうことを願い、2011(平成23)年に誕生した。常設展示では、静岡を代表する模型メーカー各社の製品や静岡の歴史が詰まった伝統工芸品の数々を設置。イベントゾーンでは大人から子どもまで夢中になれるイベントを定期的に開催している。

【開館時間】

11:00 ~ 18:00(平日)、10:00 ~ 18:00(土日祝)

※団体で来館の場合は要予約。

【休館日】

毎週月曜(月曜が祝祭日の場合は翌火曜日が休館日)
※特別営業日あり。詳しくはお問い合わせください。

【観覧料】

常設展、ショップ利用は無料。企画展のみ有料。
市民・在勤割引、団体割引あり



【所在地】〒422-8067 静岡県静岡市駿河区南町18-1
サウスポット静岡3階(JR静岡駅南口の東側 徒歩1分)
電話:054-289-3033